

## II. 実践研究の報告

### 6. 速川保育園（富山県 氷見市）

#### 1. 研究テーマ

延長保育・一時保育の実践研究

#### 2. 研究代表者

園長 上野隆子

#### 3. 保育園の所在地

富山県氷見市小久米 135 番地

#### 4. 定員数

60 名

入所児童数 67 名 内、0 歳児 5 名 1～2 歳児 15 名

3 歳児 18 名 4～5 歳児 29 名

#### 5. 保育園の紹介

本州のちょうど中ほど、日本海沿いの能登半島の付け根あたりに富山県氷見市があります。当、速川保育園は、その氷見市の限りなく能登半島に近い山間地にあります。丘に登ると日本海の水平線に浮かんで見える雄大な北アルプス、立山連峰から朝日が登り、夕方には、能登の外海を真赤に染めて燃えながら沈む夕日を見ることができます。世界一素敵なふるさと・・・と思っていますが、ご多分にもれず、この地区にも、急激に少子化が進んでおり、2000 人余りの地区人口のうち、学齢前の乳幼児数は約 3%の 60 人に満たないという現状です。

さて速川保育園は昭和 31 年に農繁期の季節保育所として開設され、同年 11 月に常設の認可を受け、定員 60 名で、小さな村の小さな保育園として歩み始めました。初まりは青年団活動だったのです。当時の村の青年団員たちが、山林から木を切り出し、机や椅子、滑り台やシーソー、ブランコ等、全て手作りで設置しました。二階建ての青年会館は、一階を、これも手作りで改造し園舎として提供されました。

それがこの「子どもの家」速川保育園の始まりです。それから園舎は改築され近代的な建物に生まれ変わりました。けれども、今のおじいちゃん、ひいおじいちゃん達が若い時に作った椅子や机は 50 年たった今もなお健在そのものです。禅寺の雲水に磨きあげられた廊下のように、つややかな木肌に、くっきりと木目が浮いている滑り台は、今は孫や曾孫たちが使っている大好きな遊具の一つです。

こうして開設された保育園も昭和 38 年に社会福祉法人の認可を受けました。

それから、経済の高度成長に伴ない農業、漁業も機械化が進み、共働きの家庭が急増するようになりました。

その頃から児童の生活環境も著しく変化をきたし、いわゆる家庭での保育に欠ける子どもたちが増え、園舎の増築を余儀なくされました。また、就学した児童たち

も、下校の途中で、ランドセルのまま、よく保育園に立ち寄るようになっていました。みんな卒園児たちですし、この子どもたちを放っておくわけにはいかず、昭和42年に緊急対策として、保育園に併設型の児童館を設置しました。その頃の児童館は公立経営でのみ認められ、民間の経営は県や市のわずかな特別単独補助金で賄いました。学校が終わると「ただいまー」と、駆け込んで来る児童たちを受け入れ、夕方は7時～8時の家族の迎えを待って帰宅していきました。ですから、この頃から児童の延長保育が始まっていたわけです。

こうして連日、40人～50人の児童が利用するようになり、速川児童館も昭和44年に児童厚生施設として認可を受け、児童厚生員2名を常置することが出来るようになりました。昭和52年に保育園園舎を全面改築し、平成11年には乳児保育室とカウンセリング室を別棟に増築し、「ぼっぼのおへや」と呼び赤ちゃんを静かな環境の中で育てることになりました。しかし、平成10年頃から少子化が進み、当地区における乳幼児の数は年々減り続けていますが、入所児童は低年齢化の傾向にあります。

#### 延長保育、一時保育を始めた動機

児童館を併設した頃から兄や姉が児童館にいるので、一緒に帰宅するため、帰りが遅くなる子たちがいました。その頃は、居残り保育とか、長時間保育とっていました。特別保育事業の制度ができて、開所時間が11時間に対する延長保育事業は、利用する者、利用される者両者が気兼ねなく対応できるようになり、この事業を行うことになりました。

特に、農繁期には、早朝7時前から扉の前に待っている姿が見られることもあります。朝7時から夕方7時までの保育です。

氷見市には、公立18園、私立5園ありますが、公立の園は特別保育の延長保育や一時保育の実施園は少ないため、当園へはこの制度を利用できるということで地区外からの入園希望者も増えてきています。

#### 研究の目的

延長保育、一時保育の利用家庭のニーズに応じて、育児補完を充分行えるか、またその環境作りも考慮して、子どもの心に負担をかけないようにするには、どのような配慮が必要か。まず子どもの長い将来にそなえた在り方を、実践活動の中から具体的な場面をとらえて研究することを目的とするものです。

#### 研究のスタッフ

上野 隆子 (園長)	岡崎美恵子 (主任保育士)
久保 則子 (保育士)	山下裕美子 (保育士)
大文字加奈 (保育士)	的場 広美 (保育士)
田子 幸子 (保育士)	上野佐知子 (保育士)

## 研究の方法、会議の状況

- ・保育内容に関する検討会を行い、延長保育、一時保育の実践に対する共通の認識や理解を持つことを話し合います。
- ・子どもの心身に負担を欠けないような、人的、物的環境のあり方を工夫します。
- ・実践を踏まえて具体的な場面を大切にすることにより、保育内容の充実を図ります。

## 延長保育、一時保育の実践検討会

延長保育、一時保育は、保育所に於ける当然の保育サービスとして受けとめていましたが、この研究事業を機に、今一度、話し合いの場を持ちました。

延長保育については、子どもの立場を考え、長い保育時間で、心身の疲労が出ないように配慮が必要です。当園の場合は10人前後の小人数なのでたて割りのくつろいだ、家庭的な雰囲気づくりに心がけています。ゆったり過せる保育内容を考え、スキンシップ、コーナーの充実、絵本の読みきかせも子どものリクエストに応じて、何回も何回も行うこともあります。また、季節や時間で子どもの生活のリズムを作る工夫もします。夏の日などは、夕日が沈みかける頃を見計らって、お花の水やりや、あひるやうさぎのえさやりをします。日が短くなると、室内で過すことが多くなります。畳のコーナー、ホットカーペットのコーナーを整えます。お話を聞いたり、編み物をしたり、手あそびをしたり・・・くつろいだ時間を過します。

迎える時は必ず保護者も保育に参加してもらいます。一緒にお話を聞いたり、作り物を作ったりした後、ごく自然に帰ってもらい、他の子どもに不安定な気持ちを与えないように配慮しています。

一時保育については、緊急保育サービスや、非定型保育サービスで預かる子どもの他に、保護者の私的な理由による利用も増えてきています。生活リフレッシュや、学校や地域の行事に参加するための利用等、その内容も多様化してきています。

そして、いずれの場合でも、私たちが一番気遣っていることは、受け入れの時の対応です。子どもに決して不安感を与えないようにすることです。保護者と保育者（託する者、託される者）の安定した気兼ねない雰囲気は、以心伝心、子どもの心に、どんなにか安堵感が伝わることでしょう。ビジネスの領域を超えた穏やかな雰囲気こそ受け入れの第一歩の誘導だと思っています。

次に、異年齢児と関わりあうことです。

少し年上の子たちとの関わりで、子どもは子ども連れ、初めは不安げな様子ですが、子ども社会になれるのにそんなに時間はかからないようです。ここは「子どもの家」ですから・・・。

家族と離れて、大きな集団の中を、初めて体験し、見知らぬ保育者に託される子どもの気持ちは、心のはじけそうになるほど大きな不安と怖さで一杯のことでしょう。大人の理由で託される子どもの心を、誰よりも、何よりも大事に考え関わるこ

とを話し合い実践しました。

保育の実践から

延長保育

「あ、おとうさん!」いったん遊びの手をとめて、お迎えの父親の顔を確認して、にっこりと微笑み、再び遊びを続けます。「いまね、おふろをつくっているの。おとうさんもてつだって、いっしょにつくろう!」楽しそうにパズル式のマットを敷いたり囲んだりの遊びの真最中です。子どもからおもちやの木づちを渡されたお父さんは、「どうするの?」「ここんとこ、トーン、トーンしてね。」親子のやりとりが始まり、お父さんもごっこ遊びにしばらく付き合いながら、終始笑顔で関わっていかれ、子どもも満足した笑顔で降園します。

また夏の園庭には、色とりどりの花が咲きほころび、お花の色水あそびを楽しんでいる子たちの姿が見られます。夕方になるとみんなで、お花の水やりをします。これも延長児たちの日課ですが、いつの間にか色水あそびに変わり、ビニール袋にお花の咲きがらをいっぱい集めています。丁度、お迎えのお母さんがこられて、「いろみずつくるから、おかあさんも、お花を摘んでね。」大好きな色水遊びにお母さんも誘っています。「家にも保育園から持って帰った、色水がいっぱい並んでいますよ。」と母親は苦笑いしながらも、一緒にお花摘みを始め、色水が出来上がり、ペットボトルとロートに親子の手を重ね合わせながら、「きれいな色やねエ」流れ落ちる赤紫の色水をながめています。「お父さんのおみやげに持って帰ろう。」一緒に作った、色水のペットボトルを手に親子で手をつないで楽しそうに降園する姿を見送る時、保育者としても、ほっとした充実感と、心温まるものを感じる一瞬です。

保護者の共働き、多様な就労形態により、親子がゆったりと関わって過す時間が確保されるのだろうか心配する中、延長保育のお迎えの際に、勤務を終えられた保護者が、ゆったりとした気持ちで、我が子と一緒に遊んでいる姿を目にすると、延長保育を通して、子育て支援の場の提供に役立っているような気がしています。そして、長い保育所での時間が、子どもの心に不安感を与えないように、

また、保護者もあせりや、不安を抱くことなく、安心感の持てる延長保育の配慮を心がけたいと思います。

一人っ子のりく君

一人っ子で5歳児の里空(りく)君、お気に入りのともだちは1歳児のあいりちゃんや、ゆりあちゃんです。

「あいりちゃん、いる?ゆりちゃんは?」延長保育室へ駆け込んできて、小さい子のお世話をします。エプロンを取り替えたり、おひぎにのせて、お話を聞いたり、やさしいお兄ちゃんぶりが、うかがえます。延長保育の交流の中では、兄弟のような関係がたくさん見られます。一人っ子たちにとっても大切な経験だと

思います。延長保育は家庭の居間のように、温かい雰囲気の中で楽しい子ども同士の交流が、一層深められることも願っています。

みのりちゃんちゃん（3歳の女儿）のお母さんは看護師です。勤務時間が不規則なため、延長保育児です。今日は会社帰りのお父さんのむかえです。午後6時半、「こんばんは」と保育室へ「あ、みのりちゃんのお父さんやー。」「お父さん、絵本、よんでエ」、ちょうど絵本の読み聞かせの時間で、始めようとしていた時でした。みのりちゃんのお父さんは、とても絵本を読むのが上手なんです。

時々、お迎えの時に読んでもらうことがあるので、最近は絵本を読む稽古をしていらっしゃるそうです。

「ようし、じゃ、これ読んでから、お帰りするヨ。」みんなパチ、パチ、パチ、みのりちゃんの満足そうな顔。「実は、この時が、子どもといっしょの楽しみな時間なんです。園の教具を使わせていただいて感謝しています。」とお礼を言って帰られます。

その、みのりちゃんには、こんなエピソードがありました。今年は何回も台風が来ました。そんなある日「保育園のブランコが飛んでいく!!」。と言って泣き出し、夜遅くに両親と一緒に、ブランコをロープで縛りに来ました。こんなことが何回かあったようです。子どもの気持ちを受け入れ、一緒にブランコを心配して夜でも、雨の中でも、様子を見に行きあげてくれる両親の行動に感心しました。

風で揺れる物に、こだわりを持つみのりちゃんについて相談を受けましたが、両親の限りなく子どもを認めるあたたかい対応に拍手を送りました。揺れる物にこだわりを持つ傾向は、しばらく続きましたが、今はすっかり消えて、降園時には、満足のいくまで父や母と遊んで帰ります。時には、保育園の中を得意そうに案内している事もあります。これも子育て支援の一助になっていると思っています。

#### 一時保育

##### ★英くんのお砂場デビュー★

一時保育については、緊急保育型の利用が多かったのですが、最近是非定型保育サービスを希望される方も増えてきました。

遠くに嫁いでいて、第2子出産のため里帰りをする例があります。祖父母に託された2歳児の英くんは、「ママー。ママー。」と一日中位いていて家中がパニック状態になったとの事でした。この子の一時保育のための依頼で来園された時のことです。

ちょうど、園庭のお砂場で遊んでいた子たちが、初めての英くんを、やさしく誘ってくれました。一緒に遊びだした英くん、まわりの子たちが、道具や遊具を貸してあげたり、お山を作ったりして仲よく自然に遊び出したのには、驚いたそうです。おうちの方は、「大丈夫でしょうか？」といいながらも。「英くーん。」

と名前を呼んだり、洋服の砂を払ったり、とにかく気になって仕方がない様子でした。「しばらく様子を見守って下さい。子どもたちにまかせておきましょう。保育士もいっしょですから。」と促しました。砂を払うのも、手をつなぐのも同じ目線に関わるので、あまり抵抗なく子ども社会に入っていけるのです。これが英くんの「お砂場デビュー」でした。まもなく英くんはお兄ちゃんになり、一時保育児でしたが保育園がすっかり気に入って、産休が明けるまでの間、年度途中入所の通常保育児となりました。

★小さいせんせい明日香（あすか）ちゃんたち★

2歳の女兒佳奈ちゃんは今日が初めての一時保育児です。お部屋でお母さんと担当の保育士が親しくお話をしながら、佳奈ちゃんのこと仲間入りさせたり、遊んだりしています。でもお母さんにしっかり寄り添って、不安げな様子です。「失礼します」と年上児の明日香ちゃんたち3人が、新しいお友たちへのプレゼントを持ってきてくれました。折紙で作った子犬やピョンピョンかえる、しまじろうのお面等「いっしょにあそぼう。」その間にお母さんは帰られました。こんな時は、年上児たちが、小さいせんせい役を發揮します。一時保育の佳奈ちゃんは、関わってくれた小さいせんせいたちとおやつを食べたり、遊んだりしていたのですが、やがてお母さんがいないことに気付いて、急にさがしまわり、泣き出してしまいました。泣きやまない佳奈ちゃんといっしょだった明日香ちゃんも、とうとういっしょに泣き出してしまいました。「だって、カナちゃんが泣きやまないから……。」その様子に佳奈ちゃんはキョトンとして、とまどっています。私たちは、飛び出していったなぐさめたい気持ちを、じっとおさえています。

ホラ、ホラ、やってきました。まわりの子たちが、3人、4人と、……。

明日香ちゃんをなぐさめ始めました。次の日は、「アッカ、オネェチャン、オネェチャン。」と朝早くから登園してきた佳奈ちゃん。受け入れの保育士より明日香おねえちゃんの姿を求めている様子を見て、「小さいせんせいにおまかせ……です。」

保護者会、父母の会日より“鳩”より

当園の父母の会では、年に1~2回、機関紙“鳩”を発行しています。保護者会の様子や、活動の様子を地域の全家庭に配布しています。その中に載せられた延長保育利用者の声を記します。

ある日の18時50分

今日も遅くなってしまった。耕平は元気になっているかなあ。

アレッ、先生方は今日も会議のようだ。

私いつも遅くまですみません。先生ご苦労様です。耕ちゃん、お父さんですよ。耕平アッ、お父さんだ。お母さんがよかったのにー。先生アレー。耕ちゃん、お父さんと遊びたかったんだよね。耕平………。私………。

先生耕ちゃん、今日、お友達に優しくしてくれたんですよ。私オッ、それは偉かったねえ。先生そうなんですよ。お食事の時、新しいお友達を案内してくれたんですよ。

ねえ、耕ちゃん。耕平ウン。(得意そうににっこり) 先生耕ちゃん、もうお兄ちゃんだね。耕平ウン。耕ちゃん、お兄ちゃん。先生じゃ、明日もまた遊びましょう。耕平先生、さようなら

先生方は本当に子どもたちのことをよく見ている。

ある時、園長先生に先生方が遅いことについて聞くと、「あの会議をしないと、子ども達を迎えられない」と言われた。

ただ、ただ、感謝、感謝である。

耕平(3歳)の父、山端 明

地区外から通った10年間

初めて速川保育園の門をくぐり、地区外から通った10年間。

長いようで短かった10年間でした。

地区外から、この園に通っていることには二つの理由があります。

まず、最初に縦割りの保育であると言う事です。年上児には、お世話をしてもらい、年下児には、お世話をしあげる。という生活の中で、自然に思いやりの心が育つような気がします。この園で育った二人の息子は、年が離れているのに仲が良く、とてもうれしく思っています。

次はやはり、延長保育が出来るという事です。働く女性が多い現代には、このような保育園はとても助かります。私自身いつも先生方に助けられました。急に迎えが遅くなったり、仕事の都合で、土曜日をお願いすることもよくありました。そんな時にも嫌な顔ひとつせず保育をして下さった先生方に、10年間の思いを込めて、お礼を言いたいと思います。

本当にありがとうございました。

谷口 啓子

まとめ

今回は、設定された期間の中で、延長保育、一時保育の実践を通して、具体的な場面を捉えて、保育内容の研究を行いました。

まず、延長保育では、できるだけ家庭的な雰囲気づくりに心がけ、長時間の保育に、心身の疲れを感じさせないように、くつろいだ環境の在り方を工夫しました。そして、お迎えの時間が親子の交流の場となったり、「子どもの家」の生活に親が参加する事により、限りなく子どもに近づく、ミニ保育参加の場となることもありました。親同士や、保育者との情報交換や、連携の場でもあったりします。お迎えの父親から「この時が、親子のふれあいの一番うれしい時間です。」と喜んで下さった時は、ほっとして、一日の疲れがとぶような気がしま

す。一時保育で、最も気を遣うことは、やはり受け入れの時です。保護者と保育者の気持ちを合わせることで、子どもに安心感を与えられるように振るまうことが肝心です。年齢の低い子には、スキンシップも大切な要素です。そして、やはり子どもには子ども連れです。この園の子たちは、新しい友だちや、小さい子、障害を持った子たちに関わることがとても上手で、みんな大好きなんです。手に負えなくなったから、途中で投げ出してしまうということはありません。佳奈ちゃん関わった明日香ちゃんのように、いっしょに泣き出しても、ちゃんと責任を果たします。私たちは、こんな様子を認める時、“小さい先生”と呼びます。これは、子ども社会のルールなんですね。大人よりも年の近い子ども同士の方が、お互いの気持ちが伝わりやすいのだと思います。こんな時は、大人の感情など無駄であり、保育士に援助を求めて来た時はすぐに応じて援助をすることにより信頼関係が生まれ、人を敬う気持ちも培うことが出来るのです。少子化で、兄弟や近所の子たちが少なくなっているこの頃、保育園での縦割り保育の中で、年上の人には敬いやあこがれを持ち、年下の人に対しては、やさしさやいたわりの、人としての心が自然に育ってきている事に気づかされました。今、巷では人間関係、つまり人としての関わりが希薄になっていることが懸念されています。三つ子の魂で心は、小さい時ほど良く育つと言われます。心の育ちが人との良い関わりによって培われる最も手近かな存在が、保育園であると思います。保育園での育ちを大切に、よい関わりを体験出来る環境の提供に努めたいと考えています。

保護者からの寄稿に、長い保育園生活を通して、家族の絆や、兄弟の美しい絆につながっている事を知らされ、感慨深く思っています。